



教皇ヨハネ・パウロ二世の神学について

福田誠二神父



数年前に教文館というプロテスタント系出版社から依頼されて『二十世紀のカトリック神学』という英書の日本語翻訳をさせていただきましたが、この著書によれば、カトリック教会は二十世紀という現代世界に適合するために「源泉（イエスの福音）への回帰」と「アジョルナメント（現代世界への適応と刷新）」を行いました。その教会刷新に最も影響力を行使した神学者が、実は、私たちの幟町カトリック教会・世界平和記念聖堂にいられた教皇ヨハネ・パウロ二世の神学なのです。

教皇ヨハネ・パウロ二世の著書『行為者としてのペルソナ』によれば、現代の人間とは生の喧騒に参与させられる行為者である。ペルソナ、すなわち、我々人間の人格は唯我独尊的に孤立するものではなく、環境に反応し、他者と出会い、交わり、相互に影響し合い、相互のコミュニケーションの中で成長する社会的存在である。神は愛であり、自身の内にペルソナ（人格）的な愛の交わりの神秘を生きるために、人間はこの「神のかたち」、「愛によって生きる」、「愛のために」造られた存在である。神は男女をこの愛に招き、その人間性に愛し交わる力と責任を課して創造された。愛には人間の体が含まれており、体は霊的な愛の担い手として造られている。配偶者としての男女が自分を互いに与え合う性は、

人間の最も深い存在そのものにかかわっている。この真理が実現する場が結婚である。この夫婦愛は人格のすべての要素を含む全体としての深い人格的な一致を目指し、相互の与え合いにおいて不解消性と忠実さを求める。さらに結婚は、子どもを産み育てる家族というさらに広がる共同体の始まりであり、人格の交わりである「人間家族」、教会という「神の家族」へと導かれ、家庭は教会を築く「家庭教会」である。「諸ペルソナ（人格）の交わりの神学」と呼ばれる神学です。

現代社会は、特に現在の日本の社会は「結婚や家庭を攻撃する社会」とであると言っても過言ではありません。結婚適齢期にある若者に、例えば、経済至上主義的な、正規労働と非正規労働という不正義を押し付けて、彼らを極力、結婚させない、家庭を築かせない状況に追いやっています。神学者カロール・ヴォイティワの「諸ペルソナ（人格）の交わりの神学」こそ、現代日本社会での福音宣教の使命に生きる私たちカトリック教会の「家庭年」と私たち日本社会自体への贈り物であると思います。

災難か試練か、それとも…

＜息子と命の遭遇＞

西ブロック YN

お子さんを亡くされたり、障害を抱えたお子様が居られたりするご家庭を見るにつけ「大変だろうなー」とは思えるが、心の底の苦勞までは計り知れないもどかしさは何時も感じてきた。

■我が家にもやってきた！■

大学生になったばかりの息子が10月上旬、原付バイクにて乗用車と正面衝突。脳挫傷で救急治療を受けてまいりました。…我が家にもその時がやってきました！

【初日の激震】

夕刻、招集した「勉強会の準備」会合の開始早々、病院からの緊急電話「息子さん、交通事故で搬送され、意識不明状態！」と。

急きょ退席し病院に向かった。道中、「祈るように」ではなく「この身を呈してでも、息子の命を助けてください!!」と心底 祈り続けた。

緊急手術は深夜にまで至り、ドクターの説明は「命が助かるか否かは50パーセントの確立」、仮に助かったにしても「重度の障害が残るのは免れないだろう」との重いコメント。

■明け方：日記より■

お前は未だ死んではダメだ!! 何故なら、神様から受けた“愛”をこの世で感じ、感謝する義務が残っているから！今は皆様の祈りの力を借りながら、この身を呈して君の生還を願い、祈ることに専念します。

■翌日～暫しの間：災難か試練か？■

翌日は司祭に来ていただき、病者の塗油を執り行い、妻には「身内と近親者への連絡は頼む」その他の外交は一切私が行う！と毅然と事態に立ち向かった(つもり)。案の定、病院、警察、保険会社など、膨大な書類と交渉が待っていた。自身の仕事も多忙を極め寝る時間はほとんど無かった。

「わが身を呈してでも」と祈り願う中、ふと旧約聖書の『試練のシーン』が幾つか頭を過る。アブラハムがイサクを捧げたシーン…愛息を



澄んだ瞳

差し出す時、親としての想いと葛藤は無かったのだろうか？。ヨブが数々の試練に会いながらも神との関わりを放棄しなかったのはどうしてだろうか？とか。

初日は「凄い試練がやってきた！」心痛と不安で満心。が、数日後には「途方もない恵みをいただいている！♪」と感じるようになった。…この機会が無ければ、身近に真剣に『生と死』を考え葛藤し黙想することも無かっただろう。息子の命を目前に、見えなかった世界を見せて頂いている！理解できなくとも、結果がどうなるろうとも、この恵みの全てを甘受させて頂こう！と感謝に至った。(人生最大の凝縮した時間を過ごしていたと思う)その後、2週間近く生死をさ迷い、意識不明のままだが、どうやら命は保てた。

■ひと月を過ぎた頃■

多忙にも関わらず毎日、病院に通った。見えているのか定かではないが目が開いてきた。見慣れた顔だけれど「この子の今の目」どこかで見たような、…ああそうだ！赤ちゃんの目と同じだ！濁りのない澄んだ瞳♪この子を通して素晴らしい世界を見せて頂いている！

■帰天：信仰の友■

息子の件は告げていなかった闘病中のYさんから連絡があった「大変な事になっていたのですねー」と余命幾ばくの床上からの労いの言葉。ありがたくも胸が痛かった。主任司祭を伴いYさんの見舞いに行った。この日は息子の再手術の日と重なってしまった。迷いに迷い、息子にはまた会える！Yさんとはこの世では最後の分かち合いになるかもしれないと息子の立合いは妻に任せての苦渋の決断。…数日後、帰天された。愛してやまぬ信仰の友との別れは辛かった。(昨年4月の平和の鐘への投稿「ぶどうの会再

建を願う」想いは、今となっては辞世の句になってしまった。天国から見守っていて下さい)

■支えられて:祈りの輪■

・祈りの輪:「祈ります」「祈っています」と多くの方々から激励を頂いた。ずっしりと温かさが伝わってくる。お蔭様で地に足をしっかりと据えながら対処できております。

・友人から:「家族に障害児が居るのもエエもんで」その子が居ることで、家族の拠点が生まれるんだ。と

(友人の子が障害児だったのを初めて知った)

3カ月を過ぎた今、コンディションの良い時には反応があったり、単語が口から飛び出したり、車イスに乗せてもらったりすることもある。日々の小さな出来事に一喜一憂しながらも皆で喜びを共有できています。



車いすにも…

■毎日呼びかけたこと■

毎日、ルルドの水の塗布と共に、二つの事を呼び掛けてきました。

①なんでもないと思っていた『普通』が、実は奇跡の連続だったんだよねー。君も父さんも、こうなって初めて気づいたよね。「どうか普通を少しでも返してください」って一緒に神様にお願いしようね。

②君は元気になって、支援して下さった方々に「ありがとう!♪」って言おうね。

■試練はあるの?■

苦難と葛藤の渦中にあると「試練だ!」と塞いでしまふ。…時間が過ぎ、見返すと「あの時こそ恵みの真ただ中だった」と思い起こすことができる。

冷静に考えると、はたして全知全能の神様が人を試さないと『人の心』を読めないなんてあり得るのだろうか?と疑問に思ったりもする。人の言葉で言う「試練」とは、実は「恵み」の事かもしれない。どうなのでしょう? 息子の命を通して感じたことをしたためました。

温かいクリスマス

夜回りの会 YE



クリスマスプレゼントの抽選用の番号くじを引く参加者

路上生活者の方々への「カレーの炊き出し」は約5年前より、日本聖公会広島復活教会と熾町教会の有志が共同で行って来ました。活動資金は信徒の募金によるものです。

2014年12月はヴィタリ神父のお声かけにより「カレーの炊き出し」だけではなくクリスマスパーティーとして開催することになりました。当日は50名近い路上生活の方々に来て下さり、大聖堂でヴィタリ神父や小林牧師のお話を聞き、聖歌隊と一緒に聖歌を歌いました。パーティーでは両教会の信徒有志のほか、広島女学院高校の学生、広島夜回りの会など多方面の協力を得て、食事や飲み物が配られ、クリスマスプレゼントもありました。後日、参加された路上生活の方々に感想を聞いたところ「クリスマスは子供の頃以来だ。懐かしく思い出した」「みんなに良くしてもらった。美味しかった」と笑顔で答えて下さいました。これ



聖歌隊と一緒に聖歌を合唱

からも「カレーの炊き出し」が宗派を超えた社会活動として、信徒同士の連帯感が深まっていくような活動として継続していくことを願っています。



編集後記 教会共同体の中には、私自身もまだ知らない活動が色々あります。この紙面でご紹介しますので、広報係に声をかけてください。